

Contents

02 目次
プロローグ Vol. 3

04 **特集 JICA海外協力隊
いつか世界を
変える力になる。**

06 想いをかたちに。それぞれの国際協力 スーダン

10 世界に羽ばたく日に向けて
長野県駒ヶ根市、福島県二本松市

14 あなたのそのスキル、生かせます

18 帰国後の進路 経験がキャリアになる

20 経験がビジネスでも生きる

22 特別授業
JICA海外協力隊を経て身につくもの

24 **特別レポート**
尾木ママ、モンゴルへ行く!

26 **ザ・研修②** 日本の知見を世界へ
一刻も早く、一人でも多く助けるために

28 **地球ギャラリー Vol. 124** パキスタン・イスラム共和国
写真・文●清水 匡
取り残された村

34 **教えて! 外務省**
知っておきたい国際協力④

36 JICAイベントカレンダー

38 広報室から、プレゼントほか

39 JICA PRESS

40 **わたしが見つけたSDGs Vol. 4**



パプアニューギニアの小学校で農業指導を行う青年海外協力隊員(コミュニティ開発)。写真:和田浩



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

世界が抱える問題に挑む 挑戦者たち

プロローグ
Vol. 3

文・黒井克行



イラスト●中村知史

物書きとして駆け出しの頃、大いに刺激を受けた仲間がいた。ひとりでいえば、彼はバイタリテイの塊である。

雑誌の企画でその彼とチームを組み、日本でマフィア化した不法滞在者組織の取材をした時の話である。難民として日本にたどり着き、その後、地下に潜って闇の犯罪集団化した実態を暴くという取材だったが、件の彼は海外生活経験から不法滞在者たちの境遇を理解し、信頼を得て組織に潜り込むという、まるでスパイ映画さながらの行動に出たのである。

相手が誰であろうとつねに同じ目線で向き合う姿勢と揺るぎない正義感があれば、信頼は築けると言う。彼には、相手の社会を理解して適応しながら、物事を冷静に見ることができると観察力があった。彼の「前職」は青年海外協力隊員だった。東南アジアで灌漑土木工事に従事するとともに、かたわらで空手とその精神を現地の子どもたちに教えていたという。

「皆、同じ人間。分かり合えないことなんてないんだ」

協力隊で培った経験を口癖のようにこつこつと表現していたが、帰国後、その精神がまったく畑違いの仕事でも生かされていくのだろうか。とにかく、反社会という壁を難なく乗り越えて向こうの世界に入り込み、すすしい顔をして戻ってきたわけでは恐らくない。今でも彼を思い出すたびに忘れかけていた勇気が湧いてくる。

最近、取材で途上国に足を運ぶことが少なくないが、必ずといっていいほど青年海外協力隊員の活躍に触れる機会がある。その活動は実に多岐にわたり、各自が有する技能や経験が活かされているのだ。たとえば、ケニアのナイロビ郊外の村にも、彼らはいった。農業指導だ。良質な農作物の生産性を高めるために現地の人たちの先頭に立って汗を流していたが、そこで行われていることのひとつがビニールハウスの竹の苗の栽培だった。隊員によると「まわりに竹が生えている土地はその根がしっかりと付いているために地盤が安定し、土

砂災害を防ぐことができる」ということで、雨季対策に備えた苗作りだった。隊員が日本で災害ボランティアとして学んだアイデアをアフリカで生かしているという。

途上国で大きな問題の一つに感染症がある。途上国では医療スタッフも医薬品も絶対的に不足している。その中で活動するのは、あえて言わせていただくと「火中の栗を拾う」に等しい過酷なものである。看護師資格を持つ女性隊員はあえてナイロビのHIV/AIDS病棟を選んで活動していた。

「一所懸命に生きようとする姿に私の方が励まされます。また、寝たきりになった子どもだけでなく、感染症の怖さを知らずに生来の明るさで笑顔のぞかせる子どもたちをみると頑張れるのかな」

協力隊員は世界が抱える問題の最前線にいる、挑戦者ではないだろうか。

先日、北海道の山間の田舎町で元隊員という女性に出会った。彼女はこの地で家庭を持ち、同級生だった夫と二人の子どもに囲まれ、幸せな生活を送っている。彼女はかつてガーナで裁縫を教え、作ったトートバッグにアフリカならではのデザインと色合いを施し、現地の女性たちが出来上がったものを売って生活の糧にするための流通網も作った。デザイナーの技能を生かした活動だったが、実は、帰国した今もガーナの人たちと交流を続けているという。

「アフリカの人たちの色使いは斬新で、日本人にない感性が生かされているのでニューヨークやフランスでも重宝がられるんです」

今でもフェイスブックでつながり、生活の情報交換を継続して行っているのだ。隊員の活動が、人生の一時に限られずその後もこのように続けられているのには頭が下がる思いだ。ちなみに、隊員同士が結ばれるという話もよく耳にする。遠く離れた地で同志として一緒に流した汗が絆となり、その後の人生もそのまま続けて共にすることになるようだ。

黒井克行(くろい かつゆき)

1958年、北海道生まれ。早稲田大学卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家に。おもな著書に、『高橋尚子 夢はきつとかなう』(学習研究社)、『テンカウント』(幻冬舎文庫)、『男の引き際』(新潮新書)、『日野原新老人野球団』(幻冬舎)など。日本大学法学部非常勤講師も務める。